会 議 録

会 議 名	平成29年度第3回野田市社会教育委員会議
議題及び議題 毎の公開又は 非公開の別	1 少子高齢社会の社会教育について（公開） 2 平成30年野田市成人式開催状況について（公開）
日 時	平成30年2月20日（火） 午前10時から午前11時40分まで
場 所	野田市中央公民館 講堂
出席者氏名	委 員 小松崎 明、戸張 泰、木名瀬 訓光、文道 尚子、 山下 麻里、横川 しげ子、高井 千鶴、佐藤 秀夫、 鈴木 昭夫、松尾 師孝、沖田 多恵子 事務局 東條 三枝子（教育長） 杉山 一男（生涯学習部長） 伊藤 公夫（生涯学習部次長兼社会教育課長） 大倉 純 （社会教育課長補佐兼生涯学習振興係長） 志賀 純子（社会教育課生涯学習振興係主任主事）
欠席委員氏名	茂呂 嘉男、河内 賀子
傍 聴 者	無し
議 事	平成29年度第3回野田市社会教育委員会議の会議結果(概要)は、次のとおりである。
	<p>1 開会</p> <p>2 委員長挨拶</p> <p>3 教育長挨拶</p> <p>事務局から、会議の公開、欠席委員の報告、会議成立の報告、傍聴者の報告及び会議録作成のための録音機の使用の説明を受ける。</p> <p>4 議事 報告事項 平成30年野田市成人式開催状況について、事務局より報告を受ける。</p>

議題 「少子高齢社会の社会教育について」

議長

これまで意見を頂いている中で、そろそろまとめていく必要があるだろうということで、意見書として出す場合に、前回確認したのは、あまり長い文章にならないということ、いろいろなところに見ていただいて、実際に応用していただくためにも、まとめ方を工夫していこうということで、意見を挙げていただいた。その結果、今日、皆さんの手元にある、このような形になったということで、項目を上手くまとめていただいていると思う。

そこで、項目別に見ていただいて、多少、そこに追加したり、修正したりする部分が出てくると思うので、今日は、そうした時間に充てていきたい。

この次の会議の時には、きちんとした文章となって、意見書として、教育長にお渡しできればと願っている。

まず「少子高齢化の現状」という項目について、皆さんの意見を伺いたい。

少子高齢化の現状については、皆さん、理解が進まれていると思うが、野田市の場合においては、微減である。若年、生産年齢層についても、微減。高齢層については、グンと増えてきている。

他市と比べても違いがあるのではないか。例えば、隣の柏、流山、春日部と比較してみると、より野田市の現状が明確になってくるかと思うが、アウトラインは、高齢化が間違いなく進んでいるということで、もう少し突き詰めていくと、次の「社会教育に求められること」で、人間関係の希薄化というところにつながっていく。皆さんから出てくる意見からすると、参加する人、しない人の格差が大きいということ。つまり、「関わり合い」という社会教育が大事にしなければならない一番大きなものが、そこに見え隠れしているということが言える。

よって、この二番目に、社会教育には今何が必要なのかという非常に大切なことが、ここに書かれている。

A委員

資料にあるグラフについて、生産年齢が大きなくくりになっているので、できたら、親世代となる40代から50代の推移が分かると良い。社会教育関係の直接的な関わり合いを持つのが、この世代だと思う。特に、現役の一番のピークに当たるので、そういう世代に社会教育に興味を持っていただく、関わりを持っていただくという意味でも、その年代層や構成が分かるグラフがあれば、それを載せていただきたい。

議長 ここに書かれていることは、「関わり合い」ということが主であるが、社会教育で今一番大切なことだということで、千葉県の社教連でも「関わり」というのをテーマにしている。我々も、やはり現状を見た時は、参加する人、しない人に分かれ、人間関係の希薄化ということが起きている。地域社会においても、自治会等も抜けてしまう人、中に入ってこない人も増えてきているということで、そのことは否めない。よって、「関わり」ということがポイントになる。

野田市の現状を見ても、関わりの欠如に対して、どう進めていくかということが大切だろうということで、最初に述べているが、「関わり合い」を現代の社会教育の一番大きなテーマにして、そこで、我々は、地域のいろいろなコミュニティに声掛けをしていくことがいいのではないかと思う。

皆さんの活動も、地域のそれぞれのコミュニティで活動するものである。皆さんからの話の中で、非常に上手くいっている例もあるが、いつも課題として挙がってくるのが、関わりの欠如ということで、最初に述べさせていただいている。

そこで、三番目は、現代の社会課題にもなっている「関わり」について、どのようにアプローチしていくと良いか、ということで、「“豊かな” 関わりの構築をめざして」という項目立てをしている。

B委員 「関わり」と「関わり合い」は、意味合い、言葉の定義をどう区別しているのか。「関わり」というのは、今の関係があって、「関わり合い」というのは、更に能動的な意味合いがあるように思える。既にある「関わり」という環境に対して、それを更に深めていく上位の概念として「関わり合い」というものがあって、そこに社会教育がアプローチしていくというように読み取ったが、言葉の整理がついていないところが見受けられるように感じる。

議長 「関わり」という課題に対し、皆さん、いろいろ感じながら活動していると思う。

体育協会の活動に関わっているが、体育協会の活動に、いろいろ参画してもらいたいと思っているが、例えば、文化活動をしている人達とも活動が融合できるような関わりが持てたら良いと考えている。互いに無関心になりがちな傾向も感じている。

次に、具体的な「関わり」の構築については、(1)として、基盤となる地域コミュニティとしてその形を提示している。

まず、自治会について考えてほしい。

C委員 役員をやってから、自治会を辞める人も多い。

D委員 名前だけの会員も多い。その先の、相互の連携を図るところまではいかない。そこが、社会教育の仕事になるのかもしれない。

E委員 南部地区では、それぞれの団体をつなぐような取組が行われていて、この「連携」というのが、とても大事だと思っている。自治会、子ども会、婦人会、老人会、PTA、学校、その他、各種任意団体等、「あおいそら」を中心にして、「あおいそら」に所属する団体で、一つの行事を作っていくということで、それぞれの団体が一緒になった取組をしているという現状も知っている。

相互に連携を図っていくということが、とても大切だと考えていて、必ずしもまだできていないというわけではなく、民間の中でも、私が所属している団体は、例えば子どものための団体で、それぞれにいろいろな団体があるのだけれども、もう一つ次元や団体を超えて、ネットワークを築いて考えて行こうではないかというような取組を20年くらいやってきている。

なので、相互に連携を図っていくということが非常に重要だと思うが、求められているだけではなく、既に活動をやっているところもあるということで、最後にまとめの中に言葉として出てくるだけではなく、項目としてももう少し浮かび上がってくると良い。各団体を超えての、横のつながりの活動というのが、非常に大切である。

F委員 地域で行われている行事については、それぞれの形ができていたので参加するけれども、高齢化もあり、行事を増やし過ぎても、かえって大変だという思いが出てきてしまうこともある。

他の団体との関わりが増えることは、連携のあり方によって、その分の大変さも出てくるので、兼ね合いも難しいところがある。

G委員 私の所属している自治会では、世帯主を女性にして、女性を中心にした自治会にしたところ、また少し新しい世帯が入ったが、それでもまた、連合会を辞めることになった。自治会長や役員の負担が大きく、辞めざるを得なくなった。自治会の防災訓練も集まりが少ない状況にある。

H委員 P T Aについても、役員の成り手がないというのを感じている。女性の社会進出に伴って、仕事をしている人も多く、学校行事には参加するが、P T Aには参加しない保護者も多いことから、会議を学校行事に合わせて開催したり、回数を少なくしたり工夫はしているけれども、参加する人、参加しない人に二極化している。関わりを避ける人も多い。

I 委員 学校としても、保護者の方の二極化というのは感じている。北部地区では、男の人も学校に関わってほしいということで、「おやじの会」が地区で発足している。単独で各学校のおやじの会というのはあるが、この地区は、北小、北中と小中まとめてのおやじの会を作っていて、お父さん達にも学校に関わってもらおうと「新しい関わり場の場づくり」をしている。仕事内容としては、校舎内や遊具のペンキを塗ったり、木を伐採したりして、少しずつ活動や人のつながりが増えていく。

自治会の加入率の話も出ていたが、前の学校では、自治会と学校との合同の防災訓練を行ったところ、自治会の加入率が50%に満たなかった。いざという時に、どうやって避難してくるのかということで、せめて地域にどんな人が住んでいるのか、顔だけでも知ろうという場づくりを行った。

関わりということで懸念していることは、今の子ども達は、「遊んで来るよ」というと、4~5人集まっても、一人一台ゲームを持って行って、会話がな。ある程度時間が経つと「またね」と言って帰って行く。ゲームを駄目だと否定はできないが、その中での関わりを大人がどう作っていくのか、関わりという場づくりの重要性を感じている。

自治会、子ども会等でも、企画するリーダー的存在の人がいると有り難いと感じている。参加することで達成感を得られるような、関わり場の場づくりをしていく必要性を感じている。

J 委員 今までとは生活状況が大きく変わってきている中で、同じものを続けて行こうとしても、難しいものがあると思う。

所属している自治会では、子ども会の関係で、急激に子どもが少なくなった時期があり、その時に、子ども会を辞めようという話も出たが、一度辞めると再開は難しいということで、休会という形を取っていたが、いろいろなイベントを行う時に、子ども達の声がしないのは、やはり寂しいということで、「子どもプロジェクト」という名前で自治会に位置付けて、5~6人の役員で、イベントの時にだけ、子どもにどういうものを届けていくかとい

うことで始めたところ、非常に子どもが集まってきた。

従来の組織からすると、そのまた上の組織、そのまた上の組織というものがあり、それが見えてしまうと、なかなか役員になることは難しくなってくるが、その時だけのイベントで、皆で知恵を出し合って一つだけやろうとなると、それで終わるので、協力が得られやすい。従来の組織というものを見直していかなければ、続けていくことは難しいと感じている。

それぞれの団体から話を聞いても、同じような課題を抱えている。

議長

それぞれのコミュニティで、連携という意味での課題があり、それについての工夫は、これまでどおりから脱皮して、変化に対応するやり方を作っていく必要があるだろう。

「4. 調整力としての行政の役割」では、地域コミュニティがより良い活動をしていくために求められるものは何か、ということで、行政の協力や手助けがないと活動できない部分もあり、行政の役割としても、従来重視ではなく、変化への手助けを行っていくことが必要であるということ述べている。

最後に、「5. すべての活動に地域の特性を生かす」では、野田は野田の良さがあるということについて、もう少し特化していく必要があるだろうということまとめている。

様々な地域コミュニティの活動が、自分達の魅力あるまちにつなげていくと、連携していくことへの基盤となる気持ちが違ってくるのではないかと。誇りある気持ちの人と、その逆になっている人との間では、関わりづくりということにおいて、相当な違いがあるだろうということで、まちが誇れるようになってくると、市民も胸を張るような気持ちになってくるという背景があるということ、全体的に皆さんに分かってもらえるような意見書になることを願いながら、まとめている。

まだ改善の余地があるので、改善していったものを次回に出して、意見書として提出するという形を取っていきたい。